

ドン・キホーテのオリンピック総括

感動的だったソチ五輪の感想はテレビ、新聞、雑誌、ネットにあふれています。私もブログに自分なりの感想を綴ってきました。その中からいくつかを再編集してここにご紹介します。ドン・キホーテ的な視点からのオリンピック総括です。

勝利の女神はほほ笑まなかった？

今期のW杯では13戦10勝。開幕前から日本のマスコミが喧伝、国民の期待を一身に背負って飛んだ高梨沙羅。その“絶対女王”が4位に沈んだ。不利な追い風にあたったことが原因の一つと言われています。ソチのジャンプ台も風も空も彼女には味方しなかったのかな？それとも初のオリンピックという重圧がスキーにもかかってしまったのかな？まだあどけなさが残る表情でインタビューを受ける彼女に少し憐憫の想いが湧いてきました。“勝利の女神は彼女にはほほ笑まなかったのか！”……。



でも、そんな結果にもかかわらず、本人はいっさい言い訳をせず「支えてくださった方々に感謝を伝えるためにここに来た」と笑顔で次を目指そうとする彼女にこちらもホッとしたものでした。まだ次がある。その次もある。長い人生に“勝利の女神”はいろんな采配をしてくるかもしれないのだから……。

努力しても思うようにならないことも！

長野から5大会連続で五輪に出場、7位、6位、5位、4位と一つずつ順位を上げてきた上村愛子。そんな努力家の彼女には“なんとかメダルを取らせてあげたい”と大部分の日本人が願ったことでしょう。残念ながら、結果は微妙な判定で4位となりメダルには届きませんでした。それでも彼女はベストを尽くした美しい笑顔を見せていました。

厳しい練習の連続。でもこれだけ努力してもダメだった。思うに、メダルを獲得した派手な成功談も嬉しいですが、「人生には努力しても思うようにならないこともある」ことを教えてくれた意味で、同じような状況で闘っている人に大きな勇気を送ってくれたのではないのでしょうか。あくなき挑戦の姿勢もまた私たちにポジティブな生き方を教えてくれたような気がします。



英語で世界のメディアに対応

冬季オリンピックの花はなんといってもフィギュアスケート。男子では予想をはるかに上回る成績で羽生結弦が世界の男子スケート界に華々しい、まさに「華々しい」という表現がぴったりのデビューをしました。

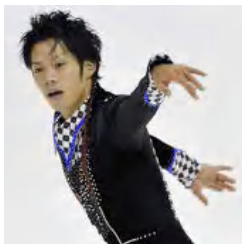
ショートプログラムでのスピード感と洗練された滑り。伸び伸びとした細身の体に紺色のシャツも新鮮に映り、抜群の技量は見ていても安心感をもたらしてくれました。

「ニッポンに初の金メダル!」。テレビも新聞も一斉に彼を取り上げました。まだ19歳という伸び盛りの若さからして、これからのさらなる活躍が期待されるでしょう。



取り上げたいのは、新聞テレビでは報道されることのないネットで紹介された陰のエピソードです。彼は17歳だった2012年5月、故郷の仙台を離れてカナダに渡り、ブライアンコーチの下で海外生活をスタートさせた。当時はまったく英語を話せなかった彼が、ソチ五輪で見た英語での取材対応は、困難を乗り越えながら成長してきた、若者の向上心の象徴でした。豊かな表情も印象的な若きゴールドメダリストのもとには、世界中のメディアが集まった。ときには通訳が助け船を出すこともあったが、ほとんどは羽生自身が英語で受け答えをしていた、といいます。私は現在、市が主催する高齢者向けの英会話教室の講師を務めていますが、さっそくこの羽生選手の陰の努力を受講生の皆さんの励みにと、紹介した次第です。

功労への感謝と後進育成への期待



その陰で、今季、体調が完璧でないなか頑張り通した高橋大輔選手の健闘も光っていました。「今季が最後」と引退も表明していましたが、日本の男子スケート界の舞台を切り開いてきた功労者。その彼が第一線を退くのは寂しくもありますが、スポーツの世界における加齢への対応、また後進の育成に力を注ぐ、といった意味ではやむを得ない流れなのでしょう。

一方、41歳にして銀メダルを手にしたスキージャンプの葛西紀明選手は「まだまだ高みを!」と次の五輪も目指すといいます。また団体戦で「若い彼らにメダルを取らせてあげたかった」との思いがまた後進の育成にも心を砕いているように感じられ嬉しいところです。



羽入選手おめでとう。高橋選手も葛西選手おめでとう、そして長い間の健闘ありがとう。

圧巻の演技とリンク外での即妙

感動の圧巻は浅田真央でした。「今度こそキムヨナを抜いて金メダルを!」と周囲の期待。ところが本人の思いと身体が合致しなかった。ショートプログラムではまさかの16位。憔悴した彼女の姿に翌日の新聞紙面は彼女への同情と応援の記事で埋まっていた。なかには「浅田真央、頑張らないで」なんてタイトルをつけ「自分のために楽しんでほしい」といったエールを送る大新聞さえありました。彼女の心を軽くしてあげたい、といった応援だったのでしょ。

翌日、フリーでは自己最高の渾身の演技を披露。6位に入賞しました。メダルは逃したものの、前日のショートプログラム（SP）でミスをして諦めないその姿に、スケート界やファンから称賛や感動の声が上がったのです。

ロシアのエフゲニー・プルシェンコ選手は、ツイッターで「君は真の闘士だ」と絶賛。世界選手権を5度制した米国のミシェル・クワンも「永遠に忘れられない演技」と称賛しています。一度失敗しても最後まで諦めずに復活した渾身の演技には、日本のみならず世界から感動と絶賛の声が上り、メダルよりもはるかに強烈な何かを（テレビを含めた）観戦者に贈ってくれたような気がするのです。

そうした状況下で森元首相は、浅田選手について「見事にひっくり返ってしまった。あの子、大事な時には必ず転ぶんですよ」とコメントしたという。氏が東京五輪・パラリンピックの組織委員会長を務めていることも影響、「最低だ」「表に出てこないで!」「森喜朗は大事なときには必ず失言する」などとコメントが相次いだのです。



フィギュアスケート女子FS、演技を終え涙を見せる浅田真央=20日、ロシア・ソチのアイスベルク・パレス（大里直也撮影）

こんな動きに対して、浅田真央の帰国後の記者会見での発言が素晴らしかった。海外メディアから問われ、「森さんが今、少し後悔しているのではないかと思います」と語って会場の爆笑と拍手を誘ったといいます。さすが！ 50歳余り年上の首相経験者の大人を批判とも言えない言葉でサラッと爽やかに切り返した。リンク外でのこんなところも彼女の人気の高い一つの要因となっているのではと思ったものでした。